

〔翻訳〕

ヘンデルのオラトリオと18世紀思想（その9）

ルース・スミス 著

赤井 勝哉* 訳

第4章 ^{サブライム}聖書の崇高

アンセムの編纂者たちが聖書の言葉を細かいところまで理解しており、自信をもって彼らが聖書からの題材を取り扱っていたという事実は、文学史家にとっては驚くべきものでもない。18世紀の文献としては、最新の文学創作活動への聖書の利用を推奨するものも、また実際に聖書を用いているものも、膨大な量が存在している。ここでは、主としてオラトリオ制作時期に出版された文献に言及し、オラトリオ台本と特に深く関わる主要な論点にだけ触れることにしよう。⁽¹⁾

18世紀になって、プロテスタントの信徒にとって聖書は十全かつ充分な真理であるという評価、および旧約聖書は類なき詩文および散文の宝庫であるという評価は、1世紀に書かれた修辞論『^{サブライム}崇高について』（当時はロンギノスの著とされたが、実際にはそれよりも前の時代の所産）によって強固なものとなった。『崇高について』は、17世紀末から18世紀中葉にかけて何度も翻訳され、イングランドの文学および批評に多大なる影響を与えた書である。ロンギノスの定義によると、崇高な様式・効果の際立った特徴の主なもの、「思想が大胆かつ雄大であること」、「感動的であること。すなわち感情を激烈あるいは熱狂的なほどにまで高める力があること」、「象徴——感情と言語の両面性がある——の巧みな活用」、「有意義で格調高い語を選び出すのみならず、比喩の助けによって様式に華を添えるような、高貴で品格のある表現の仕方」、そして「あたうかぎりの威厳と雄大さをもって、すべての文章が構成されていること」である。型通りの正確さを

* AKAI, Peter Katsuya 本学文学部教授

大胆に無視する点、感情に強く働きかける点、即座に圧倒的な影響を及ぼす点が、ロンギノス的な崇高の主たる特徴である——「崇高なるものは説き伏せるだけではなく、読者を忘我の境地へ投げ入れる」のである。⁽³⁾『崇高について』が広範な影響を及ぼしていたことは、ヘンデル愛好家にはよく知られている。ヘンデルはしばしば崇高な様式の巨匠として同時代人から賞讃されており、その際には（例えばマナリングによる伝記においてもそうであるように）崇高の本質や価値を示す拠り所としてロンギノスが引き合いに出されたからである。⁽⁴⁾

イングランドの18世紀は、理性の時代であるよりもはるかに崇高の時代であった。崇高性は常に芸術において求められ賞讃されたが、宗教的崇高こそが最も高等なものと考えられた。ロンギノスによれば、「精神は真に崇高なるものによって自ずと高揚する」のであって、「崇高はほとんど神の高みにまで引き上げてくれる」ものなのであった。宗教的な詩行は真に崇高なるものにとって最も豊饒な土壌の1つであった。ロンギノスが神の力を表現した模範例として「凡庸ならざる人、かのユダヤ人の律法制定者」（モーセのこと）に肯定的な言及をしつつ創世記1章3節の「光あれ」を引用していることは、18世紀の読者を喜ばせた。ロンギノスは文芸において旧約聖書が高く評価されていることに対して批評的な許可を与え、ユダヤ教・キリスト教の詩歌のほうが異教の文章よりも優れているという伝統的主張を是認したわけであるが、マーガレット・アン・ドゥーディが述べるように、「彼の論述は、ユダヤ教・キリスト教の伝統とギリシャの伝統との融合の可能性を示す極めて刺激的な事例を提示した」のであった。⁽⁶⁾両者の結びつきについて、ウィリアム・スミスによる訳書（1739年の初版以後、何度も増刷されている）に付された訳者尾注は、訳書本文中の古典的な事例に対して夥しい数の聖書からの例を添えることによって敷衍しているが、挙げられている例のうちの多くは、他の何十人も18世紀の批評家たちがロンギノス的な崇高を示すものとして聖書から選りすぐった諸例と同様、ヘンデルの台本作家たちによって利用されている。⁽⁷⁾

情緒的な宗教詩を評価し、聖書的、とりわけ旧約聖書的な様式を賞讃しようとする際の批評原理・美学原理を、ロンギノスは提供したのであった。彼は聖書の注釈——例えばヘンデルの協働者であったサミュエル・ハンフリーズによる注釈書——において、まさに聖書そのものを称揚する評言の正当化のために援用され

てさえいる。⁽⁸⁾ ロングノスの権威は、宗教詩の執筆を当代の詩を向上させる手段として擁護した文学改良者たちによって、大いにもてはやされた。他領域で展開された運動の場合と同様、その主導的立場にあったのはジョン・デニスであり、彼は「最高の崇高性は宗教的思想から生み出されるべきものである」という自らの主張の拠り所としてロングノスを引き合いに出している。（ゲイの笑劇『結婚後三時間』[1717年作]の登場人物サー・トレメンダス・ロンジャイナスは、デニスを意図して書かれている。）『当世の詩の発達と改良』（1701年）、さらにまた『詩における批評の基盤』（1704年）は、共にその後の30年のあいだに何度も増刷され、オラトリオの時代を通じて影響を及ぼし続けた書であるが、両書においてデニスは次のように指摘している。すなわち、最も心を打つ詩は我々が最大の関心を寄せる主題を扱ったものであり、その主たるものは宗教なのであるから、詩には宗教に発する主題を用いるべきである、と。啓示と預言と奇蹟が宗教における最も顕著な要素であるから、聖書こそが最も豊饒な源泉となる。⁽⁹⁾ ヘンデル学徒ならばここで、オラトリオにおいて預言と奇蹟が強調されていることを思い起こし、《メサイア》の芸術的成功の第1の理由は「最も偉大で最も興味深いその主題である」というシング主教の見解に思いを致すであろう。⁽¹⁰⁾ デニスは「詩において宗教を利用するための決まり事」を定め、実践を試みようとする者に対して、あらゆる「変化と多様性」に富んだ「熱狂的な感情が持つ力」と「普通の感情が持つ力」の両方を自由に働かせるようにと奨励し、「神々しい存在であれ人間であれ」どのような登場人物も「性癖や好悪の念を持っていてもよい」と念を押して、オラトリオにおける人間ドラマと宗教的情熱との結合への道を整えた。ジェネンズは1718年版のデニスの著作選集を所蔵していた。⁽¹¹⁾ ジェネンズが殊更に変わった趣味の持ち主だったというわけではない。宗教詩を奨励し、聖書の詩が同時代のほとんどの詩よりも遙かに優れていると見る点において、真面目な作家・批評家のなかでも特にデニスは、同世代およびその次の世代を代弁していたのである（『センサー』誌では、シェイクスピアでさえもがダビデに劣る詩人と判定されている）。⁽¹²⁾

デニスの意見に従った宗教詩の擁護者（と実作者）のなかには、ヘンデルの協働者もいた。アーロン・ヒル、ジョン・ヒューズ、そしてトマス・モレールである。宗教的崇高に寄与したヒューズの作品には、『世界の創造者への頌歌——オ

ルフェウスの断片によって成る』、別の頌歌『^{エクスタシー}恍惚』、「神聖なる詩について」などがある。このうちの最後の詩においてヒューズは、ありきたりの主題を聖書への言及によって飾り立てている。すなわち、人類の墮罪以前の詩は聖なる詩^{ミューズ}霊が人間に教えた神への讃歌であって、悪が彼女を脅して天へと追い払い、「異教の九人が虚しく彼女の不在の穴を埋めようとするけれど」、

しかし、目も眩むような美德の輝きを発する少数の者たちには、
過ぎ去った時代において、彼女の神々しい魅力は知られていた。
それ故、かの詩人は気高き調べで告げる術を身につけた——
どれほどの忍耐力をもって美德が地獄に勝利を収めたかを。
そしてそれゆえ、選ばれた民を導いて二つに分かれた海を渡った
あの首長は、誉め讃えの歌をもたらしたのだ。
彼女は讃える熱狂的な頌歌を与えた。その熱烈な歌物語は女の力を
讃えるもの。するとシセラは息絶えた。
彼女は敬虔なる調べを詩篇作者の豎琴に奏でさせ、
イザヤの胸をピンダロスが語る火にも勝るもので満たしたのだ！

オラトリオの熱心な愛好者であれば気づくはずであるが、ヒューズはわずか6行のあいだに台本作家たちの典拠のうちの4つに言及している。すなわちイザヤ書、詩編、モーセの歌、およびデボラの歌である。いわゆる「新古典主義」の時代であったこの当時、ユダヤ教・キリスト教の詩はロンギノスの崇高性の本質的要素——偉大な思想と感情の力——を持っているので異教の詩よりも桁違いに優れている、という主張が繰り返し行われていた。その詩が我々を感動させるのは、我々の宗教について語っているからであり、それが真理であるからだ、というわけである。⁽¹⁴⁾「多くの18世紀詩人にとって、^{バルナッソス}詩歌の世界に通じる道はエルサレム経由で続いてゆく」ものなのであった。⁽¹⁵⁾

1732年の『聖なる主題に関する詩集』（1736年に再版）に付した「聖なる詩についての短詩句による序文」においてモレールは、文学作品によって宗教を擁護することを推奨し、ウォッツ（『抒情詩の時間』）、カウリー（『ダビデのうた』）、ウェズリー（『キリストの生涯』）、ブラックモア（『天地創造』）、ノリス（『木陰

に坐して」、プライアー（『ソロモン』、コリントの信徒への手紙一13章の
バラフレーズ
言い換え詩）、ブルーム（『ポウプへの書簡』）、ウォラー（聖詩篇）、ポウプ（『メ
サイア』）、ヤング（『終末の日についての詩』）、ミルトン（『樂園喪失』）の貢献
を賞讃している。挙げられている一連の名前は、過去の100年間に於いてどのよ
うな作品が宗教詩の大いなる伝統と認識されてきたかを明らかにし、なおかつモ
レールの読書傾向を示している、という両方の意味において興味深いものである。
モレールが言うには、上記の著者たちは、人間の精神を宗教という確固とした基
盤の中に据えることで喜びを得ていた――

幾重にも幸福な詩人たち。彼らの歌は虚しくはない――
人間たちがその教訓に満ちた調べを享受し、
真摯な心で、力のなかの至高の力を知ろうと求めて
それ以上のものを知ることは求めようとしないならば。
このゆえに、不信心者は不安な疑念を放擲する。⁽¹⁶⁾

しかし、のちの《テオドーラ》の台本作家が、詩人の持つ教える力よりもさらに
高く賞讃しているのは、詩人が読者の心中に引き起こす驚嘆の念と恍惚感である。
神との合一の歓びを前もって味わわせることによって、その実現を願い求める思
いに火をつけるのである。ヤングの詩句を通して「今や驚愕と歓喜に心奪われて
／我々は正しき者の報いである恍惚たる喜びを味わう」のであり、『樂園喪失』
においては、読者は

御子の勝利に参与する――
喜びに満ちた熾天使たちが供をして御子を玉座へと連れ行き、
数多の軍勢が星の輝く平原をはるかに越え来りて
彼らの救い主たる神を厳かな調べをもって誉め讃えるとき。
その調べは天の合唱隊よりほかに歌える者はなく、
ミルトンの描く地獄の炎で呪いを受けた者は、誰もこれに応じられぬ。
あっぱれ、汝ら神聖なる詩人たちよ。その功績は、
詩の世界において、不死の名声に価する――

もし、天使たちも天から身をかがめて聞く音によって
 精神を教導し、耳を楽しませようとするのが、
 詩の最も高貴なる目標となるならば。それこそが神が
 まずお命じになり、そして神々しき預言者たちが踏み従った道。
 「*嗚呼！ 汝らの天の炎の輝きの幾許かが
 私の魂を貫き広がり、その大きな望みを満たしてくれるように！
 そうすれば控えめに距離を置いて、私は自らの本分を
 追い求めてこれを尽くし、私の神を仰ぎ見ることができよう。
 我が本分は、ほとんど知らぬ教訓を空虚な人間に教えること——
 卓越した力を崇め、己の力を疑うという教訓を。」

*パウプの『批評論』より⁽¹⁷⁾

モレールはここで、イングランドの輝かしい先達たちの徒弟として、控えめに自らを「神聖なる詩人たち」の伝統に連なる者の列に加えている。改良派の他の文人たちは、神から発する自分たちの詩の系譜を直接ヘブライ語聖書を通して跡付けた。ジェイムズ・サンプルックが指摘しているように、『冬』第2版の序文においてトムソンは、ウェルギリウスを模範として認めつつも「自分自身の詩は、
 モーセ五書やヨブ記、『樂園喪失』といった信仰の文学の伝統とさらに密接に結びついていることを仄めかした⁽¹⁸⁾」。トムソンの友人のアーロン・ヒルは、紅海渡渉の出来事ののちに神がモーセに詩という賜物を与えたという俗説を肯定的に引き合いに出しつつ、聖書をあらゆる詩歌の源であるとしている——「このとき神はまずヘブライ人に詩を教え、次にヘブライ人が人類全体に教えた⁽¹⁹⁾」。実際のところ、宗教詩を書くべし、その際には聖書に依拠すべし、という美学的・倫理的な勧め——これがオラトリオが作られるきっかけとなったものであるが——は、
 文芸批評においてはありふれたものだったのである。⁽²⁰⁾

あのオックスフォードの詩学教授〔訳注：ジョセフ・トラップのこと〕は、「偉大なる創造主の作品を寿ぐこと以上に、詩の威厳に相応しいことがありえようか」と問うた。彼のこの主張は、トムソンの『四季』によって、実際に詩のかたちを取った。この時代の最大の抒情詩であるこの作品は信仰詩であり、宗教的崇高を具現化したものなのである。1730年版は、自然における神の内在について

の讃美歌で締めくくられているが、これはこの世紀前半に発表された同じ主題に関する幾百の讃美歌のうちの1篇なのであった。改良派による呼びかけは応えられた。宗教詩は溢れ出るがごとく出版されたのである。実のところ宗教は、18世紀中葉においては主要な出版分野となっていた。⁽²²⁾ 1つだけ刊行物の例を挙げると、『ジェントルマンズ・マガジン』は1735年から37年にかけて毎年、宗教詩の競技会を開催し、送られてきた作品を公表している。題材は当時の宗教的著作が好んで取り扱った主題——生、死、神の裁き、天国と地獄（1735年）、キリスト教の英雄（1736年）、神の特性（1737年）——であった。第1回の競技会は40ページの増刊号を生んでいる。1733年以降、この雑誌の詩歌欄には頻繁に宗教詩が登場するようになるが、そこへのまさに最初の投稿はヘンデルの《ユトレヒト・テ・デウム》に関するヒルの詩であった。⁽²³⁾ 『ジェントルマンズ・マガジン』に掲載された宗教詩は、森羅万象の創造主としての神への讃歌という形式を取るものが最も多く、1740年代には平均して年に2篇が登場している。「詩を信心と結び付けようとする者にとって、讃美歌という昔ながらの道よりもほかに、崇高かつ適切にそれを行いうる方法はない。聖書に満ち溢れている偉大で崇高な文言の大部分は、まさにこの種の詩によるものなのである」、とヒルデブランド・ジェイコブは書いている。⁽²⁴⁾ 讃美歌は18世紀において然るべき文学（および音楽）^{ジャンル}の様式の地位を獲得した。そしてこれは、オラトリオの合唱を育んだ苗床の1つである。⁽²⁵⁾ ドゥーディは、18世紀の讃美歌は個々人の霊的経験についての極めて私的な心情の発露であると述べているが、ドゥーディが引いている具体例は非国教徒系のものばかりである。⁽²⁶⁾ オラトリオが依拠しているのは、そしてまた提供しているのは、それよりは個人化されていないイングランド教会会衆用の讃美歌なのであった。そこにおいては、「私」は会衆全体による讃美あるいは嘆願の中に埋没していた。また、そこにおいて、文学としての讃美歌が、歌声を獲得したのである。

聖書的題材

多くの著名な著述家が推奨し、また自ら試みたのは、単に宗教的なだけではなく聖書的な、ただ聖書的なだけではなく旧約聖書的な題材を、当世風に取り扱うことであった。聖書的題材を節度をもって劇に利用できるか否かという問題につ

いては、冒瀆法（1605年）の規定するところによって聖書劇の上演が違法となった17世紀において、すでに以下のような慣行が確立していた。すなわち、神聖な物語が改変されておらず、登場人物が単純で高貴で啓発的であり、言葉づかいが原典の持つ趣きを尊重したものであるならば、演技を伴わない宗教劇は、私的な、⁽²⁷⁾「内密な」読み物としては許されていたのである。『闘士サムソン』が内密な宗教劇の恰好の例である。私的に読まれることを目的とした劇も、当然のことながら演出用のト書を含んでおり、より鮮明に読者が情景を思い浮かべられるようになっていた。ヘンデルのオラトリオの台本に見られるト書の原理もこれと同じで、上演中、観客は目の前に台本を置いていたのである（本書23頁を参照）。聖書に基づく詩は、多くの場合、聖書に基づく劇よりも推奨された。多くの著述家がシャルル・ド・サンテヴルモンの次の見解に賛成していたのである。すなわち、「劇場は、敢えて神聖な事柄を描こうなどというまねをするとき、あらゆる心地よさを失ってしまう。また神聖な事柄は、劇場において描き出されることによって、それに関わる然るべき宗教的主張の大部分を失ってしまう」という考え方である。しかし、当のサンテヴルモン本人が「旧約聖書の物語は、ポリュエウクトスやネアルコスよりも、我々の舞台にとって限りなく相応しいものであり、モーセやサムソンやヨシュアのほうが大きな成功を収めることだろう」と認めてもおり、具体的に紅海渡渉の話、ヨシュアの祈りが太陽の動きを止めた一件、サムソンが驢馬の顎骨で大勝利を収めた記事を挙げている。⁽²⁸⁾人もあろうにアイザック・ウォッツなどは、「ヨハネの黙示録はオペラ形式の預言、あるいは劇的な詩のようである」と考えていた。⁽²⁹⁾『試金石』の著者は、ミルトンやドライデンの例のみならず、宗教劇に関する古代アテネの演劇の権威を引き合いに出しつつ、「我々の詩人たちが注意深く旧 ■ 聖 ■ や聖 ■ 外 ■の中から最良の物語部分を選びとること」を推奨し、「その結果、我々の劇場は、上品であるとともに敬虔な観客で満員になり……⁽³⁰⁾誰も芝居小屋に反対する感情を抱かなくなるであろう」と指摘している。これは、舞台用聖書劇を擁護するという点において自分が少数派であることを当の本人も知った上での発言であるが、旧約聖書の持つ劇的な、特に感情に訴えかけてくる特質を賞讃する意見は、ごく一般的なものであった。

18世紀前半において文学が取り上げるべきであるとして提示された諸々の話題が一貫してオラトリオ台本の主題となっている点、その話題の扱い方として提案

された手法が台本作家たちの手法を完全に先取りするものであった点は、注目に値する。デニスは宗教詩の代表的作者としてミルトンとカウリーに言及している。叙事詩『ダビデのうた』（1656年）——これはジェネンズの《サウル》台本の典拠の1つとなったものである——の作者序文においてカウリーは、相応しい主題として以下のものを挙げている。すなわち、サムソンやエフタの娘の物語、ダビデやヨシュアの戦記、ダビデとヨナタンの友情、モーセとイスラエルの民とによる聖地への大移動、キリストとその奇蹟に関する預言であるが、これらはのちに台本作家たちが取り上げたものばかりである。カウリーの功績および彼が示した詩の改良計画は、『ダビデのうた』以後の1世紀のあいだ、折に触れて、しかも常に敬意をもって、思い起こされた。カウリーの見解は聖書的問題についての書を著した他の2人の作家によって同調されている。1人は、幾度も版を重ねた『抒情詩の時間』におけるアイザック・ウォッツである。もう1人は『ヨブ記の言い換え。同じくモーセ、デボラ、ダビデの諸歌。厳選詩篇6篇およびイザヤ書の数章、ならびにハバクク書第3章』（1700年に初版、17016年に第2版）の著者序文におけるサー・リチャード・ブラックモアで、この書で扱われている聖書箇所多くはオラトリオ台本の歌詞の典拠ともなっている。またロバート・ボイルも『ダビデのうた』を賞讃しており、「才能ある世俗の人々」が書く宗教詩の魅力を擁護している。そのような人々が優雅な文体を有し、名声を持ち、（聖職に就いている詩人たちならば愛着があるかもしれない）立身出世主義からは遠い存在であることが、彼らをして「宗教について書くことにに関して、（特に紳士方にとって）学者や聖職者たちよりも、概して、より大きな成功を収め」せしめている、と言うのである。そのような著者によるそのような作品は注目を集める、というボイルの主張が正しかったことは、のちに証明される。彼の兄が書いたサウルに関する劇、および彼自身によるテオドーラについての小説は、両人の死後50年以上も経ってから、ヘンデルのオラトリオ台本作家によって用いられたのである。⁽³²⁾

ボイルは自分が「物語の主題が必要とする以上にテオドーラの美しさについて頻繁かつ肯定的に言及し、彼女の恋人の愛情を感傷的に描いた」ことを正当化しなければならないと感じていたのだが、この教訓的な作品に「才能ある若々しい人々」の注意を引きつけておくためには、この「当世風の様式」は必要だったの

である。ただ「不幸なる美德」ということだけでは、文学の改善を甚だしく必要としている観客に興味を抱かせるには不十分であろう。明らかに台本作家たちも同意見であった。彼らは魅惑的な女性とこれを熱愛する賞讃者もしくは夫が登場する典拠を選ぶか、もしくはその登場人物を自らの典拠へと組み入れているのである。（《テオドーラ》のほかには、《エスター》、《デボラ》、《アタリア》、《サウル》、《サムソン》[サムソンも、もとは献身的な夫であった]、《ヨセフとその兄弟》、《アレクサンダー・パルス》、《ヨシュア》、《サムソン》、《スザンナ》、《エフタ》がそうである）。ある者たちにとって、聖書に登場する女性たちを文学的に用いるという可能性は、書本文そのものによって十分に引き出されていた。『試金石』の著者は、「美德の勝利および肉欲に対する当然の報いがこれ以上明白に見られるところは、スザンナと2人の長老の話をおいて、ほかにどこにあるか」、「最高の真の堅忍が、もしくは不屈の敬神の念が、女丈夫ユディトがホロフェルネスを打ち負かす話における以上に——あるいはまた、心を魅了するような控えめさが、エスターがアハシュエロスを籠絡する物語における以上に——輝かしく光を放っている箇所がほかにあるか」と問うている。この点に関しては、聖書を当今の詩歌の題材として用いるという考え方に異議を唱えたロード・シャフツベリーの見解が密接に絡んでいる。彼の見解も同様に、のちの台本作家たちが聖書を利用するに際して行なったことを予期させるもの（であり、我々に明示してくれる文献）である。シャフツベリーが言うには、確かに旧約聖書には「古代人が大いに誉め讃えた英雄たちに少しも引けを取らない」英雄が登場するが、「彼らの多くにあの心地よい雰囲気を加えることは難しいであろう。英雄的資質と雅量とに関して普遍的に人間が有していることが知られている考え方によると、人類にとっておのずと快適さを感じさせるように描写するには缺かせない、その雰囲気のことである」。異教徒に対してどれほど選ばれし民の側を味方しようとしても、「それでもなお我々の内には、我々と同じ姿かたちをした被造物に対する偏愛が残る」ために、信仰深い英雄たちに異教徒が懲らしめられることに我々は嫌悪の念を催すであろう。詩はより峻厳になろうとする我々の機能を弛緩させるように促すものであり、「そのような精神の状態のときに我々は、異教徒が異教徒として扱われ、信仰深き人々が神の怒りの執行者とされるのを見るのが忍びなくなってしまう。……ヨシュアの軍事行動も、モーセの

逃避劇も、最良の詩人の才覚をもってしても、エジプト人が〔訳注：金銀の装飾品や衣類（出エジプト記12章25節）を〕貸し与えたという事実の助けを借りても、我々を十分に納得させることはできない⁽³⁴⁾。聖書記事に私見を織り交ぜながら編集するという作業において台本作家たちは、まさにこのような、情緒的18世紀人が苛まれた道義的・倫理的な戸惑いを示しつつ、同時にこの戸惑いに折り合いをつけたのである（本書第10章を参照）。

道徳的博愛主義者であったシャフツベリーの、聖書の登場人物は洗練された感情を欠いているがゆえに文明人の好みには合わないとする異論は、少数派に属する見解であって、たび重なる反駁を受けた。ジョン・ハズバンズは、ヨナタンを悼むダビデの言葉における優しい心情と劇的な感情の高ぶり、息子たちに対するヤコブの愛およびヨセフの物語全体を賞讃しているが、このことがジェネズに《サウル》の山場を書かせ、ミラーに感傷劇《ヨセフとその兄弟》を作らせるきっかけとなった。ヨセフの物語に対するハズバンズの反応は、他の聖書注釈者にも共通するもので、綿密に作られた劇というものであった——「まことに、『ヨセフ』の場合と比べると、徹頭徹尾これほど巧妙に仕立てられた物語はなく、これほど上演するのに相応しく練り上げられた筋書きはなく、これほど自然に展開してゆく話はなかった⁽³⁵⁾」。チャールズ・ロリンはさらに台本の筋書きの青写真を提供する手前にまで近づいており、ミラーがいかに見事に涙もろい優雅な情操を好む教養人階層の趣味につけ込んだかを、我々に示してくれている。ヨセフと兄弟たちとの和解に関するロリンの以下の記述は、ミラーによるその劇化を説明する際にも同様に機能するであろう。ただしミラーの場合は、物語の展開を延々と引き延ばし、感極まって沈黙する場面を増やし、ヨセフが涙を流す回数を足し加えることによって、哀感を増幅させてはいるが。

あの素晴らしいヨセフの物語以上に人の心を打つものはありえないであろう。ベニヤミンを目の前にして胸が張り裂けそうになったヨセフが涙を拭うために外に出て行かざるをえない姿を見たならば、誰もが自分の涙を抑えるのに一苦勞するはずだ。あるいはまた、自らの素性を明かしたのちに、ヨセフが愛しい弟のベニヤミンの首にすがりついて力の限りに抱擁し、ベニヤミンと共に涙を流し、他の兄弟たち——ヨセフはその

一人ひとりをかき抱いて涙を流したと言われている——に対しても同様の深い愛情を看取する様子を見たならば。この場面では誰一人として言葉を発した者がいないが、この沈黙はヨセフが用い得たいかなる表現よりもはるかに雄弁である。驚き、嘆き、過去の追憶、歓び、感謝の念のために、彼らは言葉を発することができない。彼らの心情は、涙によってのみ吐露されうるのであろうが、しかし、この涙によっても十分には彼らの思考を表現できはしない。⁽³⁶⁾

ヨセフが兄弟たちに身を明かすという聖書の記述を賞讃する声は、ポウブによってさえも発せられている。ポウブはこの記述が、オデュッセウスがテレマコスに自らの正体を明かす場面よりも優ると考えていたのである。⁽³⁷⁾ ハズバンズはまた、「極めて真つ当な劇詩」であるとして雅歌を賞讃しており、ヘンデルの台本作家たちがそうであったように、伝統的な象徴的解釈を完全に無視している。一方、プライアーは自作の『ソロモン』（1708年）に序文を付して、いま執筆するとしたらソロモンの「著作」中に明示されている智慧がよい、と推奨している（智慧はヘンデルの同名オラトリオの中心部分において寿がれている）。⁽³⁸⁾

我々はオラトリオ台本において、最も賞玩されていた聖書の文章が繋ぎ合わされて用いられているのを頻繁に目にする。サー・フィリップ・シドニーが世界最高級の詩として引き合いに出したモーセとミリアムの歌、そしてデボラの歌は、崇高性を示す具体例として18世紀にもて囃されるようになった。これはイザヤ書の多くの部分（《メサイア》台本でも用いられている）、詩編（特にミルトンによる訳文が顕著で、これはハミルトンが《機会オラトリオ》台本に用いている）も同様である。以上の4つの古典的規範は、神聖詩に関する前出のヒューズの詩行においても言及されている。紅海渡渉は《エジプトのイスラエル人》の主要部分を成しているが、モーセの歌とミリアムの歌が当時の文学的流行であったことは、以下の事実の説明となる。すなわち、ヘンデルはそれらを含む聖句から成る部分〔訳注：現在、一般に第3部といわれている部分〕を最初に作曲した、しかもそれ自体で独立した音楽群として曲を付けた、という事実である。紅海渡渉は《機会オラトリオ》（部分的に《エジプトのイスラエル人》を再利用）においても言及されているし、《ヨシュア》には類比による仄めかし（第1部の主題であ

るヨルダン川渡渉において相似関係になっている）があり、《エフタ》でも〈彼の大声が雷鳴となって響くとき〉において仄めかされている——このことは20世紀の聴衆の多くは看破できないだろうが、当時の聴衆ならば、神の超越的な力を示すために好んで用いられた表象として、瞬時に気づいたのではなからうか。1735年の『ジェントルマンズ・マガジン』宗教詩競技特集号は、巻頭にジョン・ハルスの「神聖詩の威厳について」を掲げているが、この序文詩もまた、ヨブ記、ヨシュアが太陽の運行を止める話、ダビデの詩篇と並んでモーセの歌とデボラの歌を取り上げて、特に賞讃している。チャールズ・ロリンはダビデの歌の分析的な鑑賞のために18ページを費やしている。⁽³⁹⁾再三再四にわたって、殊更に賞讃されるのはモーセの歌、デボラの歌、および詩編なのであった。これらは三合唱隊祭の説教にも繰り返し登場している。教会音楽を正当化するために引用されたのである。タズウェル（およびその他大勢）が指摘しているように、モーセの歌は天上において歌われるがゆえに、特別に神聖なものとなっている。

そして我々はこの芸術〔宗教的音楽〕が、宗教を補助するために偉大なるユダヤ教の律法付託者によって招じ入れられるのを見る。彼は自らが神と親しく交わって、神聖なる創造主から直に与えられた宗教を広めた人であった。彼の聖なる歌のうちの2つは現存しており、これらは文体と作風においてことのほか気高く高貴であるが、ここで我々の特別な注目を引くに価することは、後者が黙示録の著者によって、天上の祝福された者たちによる讃美・称揚の主題として記録されている点である。この者たちはこのモーセの歌を絶え間なく歌い続けるものとされている。（ヨハネの黙示録15章3節）

タズウェルによる以下のデボラの歌の賞讃は、この歌が寿ぎうたうバラクとヤエルとシセラの物語——とても現代人の意には染まない物語である——を、何故ある台本作家が劇化しようとしたのか、容易に説明してくれる。

デボラとバラクの歌はまさに崇高の極致であって、もとの言語の語法に殊更に合わせて作られた翻訳には様々な短所があるけれども、我々がこ

の歌について様式の荘厳さのゆえに考察するのであれ、心情の美しさや一途さのゆえに思いを巡らせるのであれ、この歌がかつて地上に現れた、人間が書いた最も高尚な諸作品に対してさえ、まさに真正なる批難となっていることは認めなければならない。このことは、比較検討してみれば⁽⁴⁰⁾ すぐさま分かることである。

同様にして、ヘンデルの《デボラ》の台本作者サミュエル・ハンフリーズも聖書注釈書において、崇高で感動的な詩歌を目指したいかなる古典的試みをも凌ぐものとして、デボラの歌を賞讃しているのである（ハンフリーズの賞讃はフォリオ版4ページ半にわたって繰り広げられており、これは18世紀の聖書注釈書の標準から見ても相当に多い分量である⁽⁴¹⁾）。

彼らは全員が以下の主張において一致していた。すなわち、旧約聖書にあっては「雄弁が真理の玉座の横に坐し」ており、簡明性と、「心に火を付け、そして同時に読者を驚愕させ、より善きものとし、恍惚とさせる」ことができる「感動をもたらす不思議な力」とを、畏敬の念を惹き起すように結合させて、我々に「宗教のみならず、天からの言語」を与えてくれている、という主張である⁽⁴²⁾。

《メサイア》においてジェネズがイザヤ書を利用することになる道が備えられていたことを、ジェネズが選んだ、まさにその聖句が有する力強さと哀感とに対する同時代人の賞讃の中に、我々は見て取ることができる。チャールズ・ロリン（ジェネズは彼の著作を所蔵していた）は指摘している——「預言者たちは生々しく感動的に、かつ哀調をもってキリストの受難を描写しており、預言書には情感と内省に満ちている」のに対して、それよりは魅力に缺けることに「福音書記者たちは、簡潔に、感情あるいは内省を抑えて、受難を語っている」と。ロリンは「我々のためにひとりの嬰兒が生まれた……平和の君と……」に1ページ半を費やし、特に「支配は彼の肩に置かれ……」を褒めあげて、これを「相応の注意力をもって考察するならば、特別な力強さ」を有する「素晴らしい表象」であると述べている⁽⁴³⁾。ロバート・マンソン・マイヤーが指摘したように、芸術表現の主題としてはジェネズの選択は独創的なものではなかった。ポウプの『メサイア。聖なる牧歌。預言者イザヤの書からの複数の聖句によって成る。ウェルギリウスのポリオに倣いて』（1712年）は、「メシア」を主題として書かれた最も早

い時期の最も人気のある詩の1つなのであって、決してメシアに関する唯一の作品というわけではなかったのである（この主題が流行しこれが旧約聖書の預言と結び付けられた理由のうち、文学とは関わりのない理由については、本書第6章を参照されたい⁽⁴⁴⁾）。ジェネンズの台本と同様、これらの詩の多くは暗示的であり、読者が聖書を熟知していることが当然の前提となっている。例えば、トマス・ハリスの『キリストの降誕と人類の贖いについての讃歌』（1722年）においてラザロの蘇生が語られる際、ラザロの名前は明示されていない。

（以下、次回へ続く）

注

- (1) 叙事詩制作の基盤として聖書が用いられたことについては、本書第5章において論じる。本章において概観する問題のいくつかは、欽定訳聖書に対する18世紀前半の反応を調査した以下においても扱われている。David Norton, *A History of the Bible as Literature* (Cambridge, 1993), II, 4-73. 同様に、以下においても取り上げられている。Howard D. Weinbrot, *Britannia's Issue: The Rise of British Literature from Dryden to Ossian* (Cambridge, 1993), ch. 11; Alun David, 'Christopher Smart and the Hebrew Bible: Poetry and Biblical Criticism in England (1682-1771)', Ph. D. diss., University of Cambridge (1994).
- (2) 'Longinus', *On the Sublime*, ed. D. A. Russell (Oxford, 1964), pp. xliv-xlv.
- (3) *Dionysius Longinus on the Sublime: Translated from the Greek, with Notes and Observations*, ed. and trans. William Smith (1739, 2/1743), pp. 3, 14, 16, 18, 22, 78-81, 86, 87. 18世紀におけるロンギノス受容については、以下を参照。David, 'Christopher Smart', pp. 18-40.
- (4) A. H. Shapiro, "'Drama of an Infinitely Superior Nature": Handel's Early English Oratorios and the Religious Sublime', *M & L* 74 (1993), 215-45; [John Mainwaring et al.] *Memoirs of the Life of the Late George Frederic Handel* (1760), pp. 162-4, 167, 174-6, 190-1, 201-4; Peter Kivy, 'Mainwaring's Handel: Its Relation to English Aesthetics', *Journal of the American Musicological Society* 17 (1964), 170-8.
- (5) Samuel H. Monk, *The Sublime: A Study of Critical Theories in Eighteenth Century England* (New York, 1935, repr. Ann Arbor, 1960); David B. Morris, *The Religious*

- Sublime: Christian Poetry and Critical Tradition in Eighteenth Century England* (Lexington, KY, 1972). 本章で用いている資料の多くは上のMorrisの優れた研究から得たものである。同書にはオラトリオを解明しようとする際に判断の基礎とすべき情報がまだまだ含まれている。
- (6) Margaret Anne Doody, *The Daring Muse: Augustan Poetry Reconsidered* (Cambridge, 1985), p. 267.
- (7) Smithによる訳書中の例としては、サウルとヨナタンへのダビデの哀歌（《サウル》）、デボラの歌（《デボラ》）、詩篇24の最終部分、マタイによる福音書11章28-30節、ヨハネの黙示録19章11-17節（以上《メサイア》）、ヨブ記29章（《エジプトのイスラエル人》）が挙げられる。三聖歌隊祭における例えば以下の説教も参照されたい。William Taswell, *The Propriety and Usefulness of Sacred Music. A Sermon Preach'd in the Cathedral Church of Gloucester, at the Anniversary Meeting . . . September 8, 1742* (Gloucester, n.d.), pp. 11, 13（モーセとミリアムの歌、デボラとバラクの歌）。また、以下も参照。Joseph Trapp, *Lectures on Poetry*; tans. W. Bowyer and W. Clarke (1742, first publ in Latin, Oxford, 1711-19), pp. 97, 205; [Charles Gildon,] *The Laws of Poetry . . . Explained and Illustrated* (1721), p. 115（モーセおよびデボラおよびダビデの「頌歌」）。
- (8) Samuel Humphreys, *The Sacred Books of the Old and New Testament, Recited at Large* (1735), I, 3. なお、これは創世記1章3節についての注解である。
- (9) John Dennis, *The Advancement and Reformation of Modern Poetry* (2/1709, repr. in *Miscellaneous Tracts*, 1727), in *The Critical Works of John Dennis*, ed. E. N. Hooker (Baltimore, 1939), I, 197-278; *The Grounds of Criticism in Poetry*, partly rept. in *Selected Works* (2/1718), by Aaron Hill in *The Prompter* no. 171, 25 June 1736, and thence in the *London Magazine* for the same month under the title 'Poetry a Friend to Religion'. 詳細は以下に拠るが、そこではデニスと同様の見解を表明する同時代の文献6点が挙げられている。Hooker ed., *Works*, I, 508-9.
- (10) 本書34頁を参照されたい。
- (11) Messrs G. Trollope (London), *Gopsall, Leicestershire, Catalogue of . . . the Extensive Library*, 14 October 1918 (copy in Victoria and Albert Museum Library).
- (12) Lewis Theobald, *The Censor*, no. 84 (1717), III, 156. 同様なものとしては、例えば以下を参照。Taswell, *Sacred Music*, p. 13.

- (13) John Hughes, *Poems on Several Occasions* (1735), I, 92-3.
- (14) 例えば以下を参照。Dennis, *The Advancement and Reformation of Modern Poetry*, Works, ed. Hooker, I, 251, 261-71; Alexander Pope, 'Advertisement' to *Messiah* (first published in *Spectator* no. 378, 14 May 1712): 「いくつかの見解を比較検討してみれば、読者は〔異教の〕詩人の場合と比べて預言者による描写や記述がどれほど優れているかを理解できるのではないか」(*Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, ed. E. Audra and Aubrey Williams, *The Poems of Alexander Pope*, I [1961], p. 111); *Spectator* nos. 453 (9 August 1712), 663 (15 December 1714), ed. Donald F. Bond (Oxford, 1965), IV, 94-5, V, 163-7; Sir Richard Blackmore, *A Paraphrase on the Book of Job: As Likewise on the Songs of Moses, Deborah, David, on Six Select Psalms and some Chapters of Isaiah, and the Third Chapter of Habakkuk* (2/1716), p. lxxxix; Anthony Blackwall, *A New Introduction to the Classics* (1718), p. 102; Thomas Stackhouse, *A Complete Body of Speculative and Practical Divinity* (1729, 2/1734), p. 60.
- (15) Morris, *Religious Sublime*, p. 92.
- (16) Morell, *Poems on Divine Subjects, Original, and Translated from the Latin of Marcus Hieronymus Vida, Bishop of Alba (and M. A. Flaminus)* (1732, 2/1736), pp. i-iv. この巻頭詩は41組の二行連句からなり、言及した作品を示す脚注が施されている。
- (17) *Poems on Divine Subjects*, ll. 53ff, 65ff. [訳注：最後の6行はポウプの『批評論』からの引用であるかのように原典には記されているが、ポウプの詩句がそのまま使われているのは1行目と6行目のみであり、あいだの4行はモレールが大きく改変している。]
- (18) *The Seasons and The Castle of Indolence*, ed. James Sambrook (Oxford, 1972, rev. 1987), p. xiii.
- (19) Hill, 'Preface to Mr. Pope concerning the Sublimity of the Ancient Hebrew Poetry', prefixed to *The Creation. A Pindaric Illustration of a Poem originally Written by Moses on that Subject* (1720), ed. G. G. Pahl, Augustan Reprint Society ser. 4 no. 2 (Ann Arbor, 1949), p. 4.
- (20) 聖書に依拠する詩に異議を唱える18世紀前半の意見（そのなかには、ポウプのように自分自身も聖書に依拠する詩を書いた批評家によるものもある）については、以下を参照。David, 'Christopher Smart', pp. 41-54.
- (21) Trapp, *Lectures on Poetry*, p. 190.

- (22) 「宗教的な作品一般、特に聖書批評への、ほとんど驚くべきほどの興味関心」の証左としては、以下を参照。Thomas R. Preston, 'Biblical Criticism, Literature, and the Eighteenth-Century Reader', in *Books and their Readers in Eighteenth Century England*, ed. I. Rivers (Leicester, 1982), pp. 97-126.
- (23) 'An Ode, on the Occasion of Mr Handel's Great Te Deum, at the Feast of the Sons of the Clergy', quoted Deutsch pp. 306-7.
- (24) Hildebrand Jacob, 'Of the Sister Arts', Works (1735), p. 401.
- (25) この時代の讃美歌およびその他の宗教的な歌に関しては、さらに以下の諸文献を参照されたい。Shapiro, 'Drama', pp. 217-18, 232-3 (旧約聖書との密接な結び付きを指摘している); Donald Davie, *The Eighteenth-Century Hymn in England* (Cambridge, 1993); Madeleine Forsell Marshall and Janet Todd, *English Congregational Hymns in the Eighteenth Century* (Lexington, KY, 1982). また、以下によると、18世紀中には7000を超える讃美歌が書かれたという。Morris, *Religious Sublime*, p. 79.
- (26) Doody, *The Daring Muse*, p. 75.
- (27) 1605年以前のプロテスタントの聖書劇については以下を参照されたい。Patrick Collinson, *The Birthpangs of Protestant England: Religious and Cultural Change in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (1988, repr. 1991), pp. 98-113. また、(全面的に信頼できるわけではないが、オラトリオについて学ぶ者にとっては刺激的である) 以下も参照。Murray Roston, *Biblical Drama in England from the Middle Ages to the Present Day* (1968), chs. 2 and 3.
- (28) Charles de Saint Evremond, 'Of Antient and Modern Tragedy', *Works Made English from the French Original* (2/1728), II, 104.
- (29) Isaac Watts, *Horae Lyricae*, p. xvii.
- (30) *The Touch-stone* (1728), pp. 50-1. この作品とオラトリオとの関連については、本書第2章を参照されたい。
- (31) Robert Boyle, *Some Considerations touching the Style of the Holy Scripture* (1661), Epistle Dedicatory. この献呈書簡は、ボイルの兄オーラリ伯爵 [訳注: ロジャー・ボイル] にささげられている。
- (32) ボイル [訳注: 兄のほう] が書いたサウルを主題とした悲劇は、ジェネズが台本作りにあたって聖書以外で用いた典拠の主要なものである。以下を参照。Ruth Smith, 'The

- Achievements of Charles Jennens (1770-1773)' *M & L* (1989), 161-90, at p. 187. カウリーの作品、またこの作品が持つ絶対君主制および王権神授という主題（これはジェネンズにとって重要な問題であった）については、以下を参照。Doody, *The Daring Muse*, pp. 62-3. モレルによる《テオドーラ》台本（1750年）に登場する人物および出来事は、ボイル〔訳註：弟〕の以下の作品をびたりとなぞったものとなっている。Robert Boyle, *The Martyrdom of Theodora and of Didymus* (1687, repr. *Works* [1744], IV, 425-63).
- (33) *The Touch-stone*, p. 55.
- (34) Anthony Ashley Cooper (the third earl of Shaftesbury), *Characteristicks of Men, Manners, Opinions, Times* 86/1738), I, 356-8.
- (35) 'Preface containing Some Remarks on the Beauties of the Holy Scriptures', *A Miscellany of Poems by Several Hands*, ed. John Husbands (Oxford, 1731).
- (36) Charles Rollin, *The Method of Teaching and Studying the Belles Letters* (1734, 4 /Dublin, 1742) II, 377.
- (37) Alexander Pope, note to *Odyssey* XVI, cited Norton, *History of the Bible*, II, 30.
- (38) Matthew Prior, *Literary Works*, ed. H. Bunker Wright and Monroe K. Spears (Oxford, 2/1971), I, 306.
- (39) Rollin, *Method of Teaching*, II, 392-409. これはロリンが注記しているように彼の師マルク=アントワヌ・エルサンに由来するものである（II, 385）。
- (40) Taswell, *Sacred Music*, pp. 11, 13.
- (41) Samuel Humphreys, *The Sacred Books of the Old and New Testament, Recited at Large* (1735), on Judges V. 1-2.
- (42) Boyle, *Some Considerations*, pp. 242-3; Joseph Spence, *An Essay on Pope's Odyssey* (1726), II, 57-8, echoed verbatim by Husbands, *Miscellany of Poems*, preface, sig. b2r, v; Rollin, *Methods of Teaching*, II, 349-55.
- (43) Rollin, *Method of Teaching*, II, 349, 358-9.
- (44) Robert Manson Myers, *Handel's Messiah: A Touchstone of Taste* (New York, 1948), p. 58.

訳者付記

以上はRuth Smith, *Handel's Oratorios and Eighteenth-Century Thought* (Cambridge University Press, 1995) の第1部 'English origins of English oratorio' の第4章 'The biblical sublime' 前半 (pp. 108 - 119) と、その尾注の部分 (pp. 382-85) を試訳したものである。

毎度のことながら、原著の難解な部分——特に、引用されている18世紀の文章は訳者の手に余ることが多い——については、質問メールで著者をお煩わせた。ここであらためて謝意を表しておきたい。それでもなお思わぬ不備はあるかもしれない。読者の忌憚のないご批判・ご指導を切にお願い申し上げる。